

相手の心に寄り添う



下級生の お世話

おわた みみか
太田美咲さんは小学六年生。毎朝、同級生の鈴木優花さんと一緒に、近所の下級生たちを連れて登校しています。



私たちは、多くの人とのつながりの中で生きています。その中で「自分のことを理解してもらえた」と実感したときには、大きな喜びを感じるでしょう。これは、ほかの人にとっても同じです。よりよい人間関係を築くためには、自分のことを考えるだけでなく、まず相手を思いやり、相手を理解しようとする姿勢を持つことが大切ではないでしょうか。

今回は、相手の心に寄り添うことについて考えます。

近所には、ほかに同学年の子がいなかったので、二人は最上級生になるときに相談して、下級生の面倒をしつかり見ようと決めていました。美咲さんたちの通学路は裏通りですが、スピードを出して狭い道を通り抜ける車やバイクが多かったからです。

「あつ、また車が来る。優花ちゃん、後ろのほうお願いね。みんな、歩道から出ちやだめよー」

新しく一年生になった子たちは、友だちと一緒にいるだけでうれしいようで、はしやいで歩くので気が抜けません。途中で忘れ物に気づいた子がいると、美咲さんが一緒に家まで戻ることもありました。一人っ子の美咲さんは、たくさんの弟や妹ができたようで、世話を焼く

ことがとてもうれしく感じられました。そんな美咲さんを「お姉ちゃん」と慕って、手をつないでくる女の子も出るほどでした。

二期が始まると、一年生が慣れてきたこともあり、ずいぶん楽に登校できるようになりました。最近では優花さんと二人でおしゃべりをしていても、心配がありません。

そんな中、一つの問題が持ち上がりました。翔太くんという男の子が、集合場所に遅れて来るようになったのです。美咲さんは、初めの何回かは「まだ一年生だし、仕方がないか」と思っていました。が、十分ほど周囲を待たせても気にするようすが見られない翔太くんに、不満を募らせていきました。

遅刻を 注意して

そんなある日。美咲さんはどうとう強い口調で翔太くんを注意しました。

「翔太くん、約束の時間に遅刻しちゃダメじゃない！ いつも翔太くん一人のためにみんなが待ちぼうけなんだよ。明日遅れたら、置いていっちゃうからね！」

いつもは優しい美咲さんからの厳しい注意に、翔太くんは驚いたようすです。「だつて……」と小声で言いかけたところに、周りから「そうだよ、そうだよ」と

はやし立てられて、今にも泣き出しそうな顔になりました。

するとそのとき、優花さんがすつと翔太くんのほうに歩み寄ってかがみ、頭をなでながら言いました。

「翔太くん、今朝はちょっと寝坊しちゃったんだよね。明日からはちゃんと時間どおりに来られるよね」

美咲さんは、仲良しの優花さんが一緒





に翔太くんを注意してくれると信じていたため、急に腹立たしく思えてきました。

「優花ちゃん、なんで翔太くんをかぼうの!? 翔太くんの遅刻は昨日今日の話じゃないでしょ! みんなが迷惑してるのに。だいたい優花ちゃんは、みんなに甘いよ!」

優花さんの顔がこわばっていくのを見て、美咲さんは「しまった」と思いましたが、言った手前、どうにも収まりがつかせません。

美咲さんは、ふいと横を向いたまま、学校への道のりを一人で歩き出しました。優花さんも翔太くんも、ほかの下級生たちも、しばらくその場に立ちつくしていました。

「正しいこと」を 言ったのに……

「遅刻する翔太くんが悪い」という思いから、つい強い口調で注意してしまった美咲さん。『私は正しいことを言ったのに……でも、言い過ぎたかもしれない』と、複雑な気持ちを抱えたまま一日を過ぎました。隣のクラスの優花さんと顔を合わせるのが気まずくて、学校では休み時間もほとんど教室にこもっていたのでした。

家に帰っても、「ただいま」の声に元氣

がありません。

「あら、どうしたの？ 元氣がないわね」お母さんのその言葉に、美咲さんは、翔太くんがいつも集合時間に遅刻すること、今朝そのことで翔太くんを非難したこと、怒った拍子に優花さんにも当たってしまったことを打ち明けました。

するとお母さんはこう言いました。

「きちんと遅刻を注意しようと思ったのは、さすが六年生ね。でも、いつもみんなに優しくしてきた美咲が、どうして今日に限ってそんな言い方をしたの？」

「いつもは我慢していたんだよ。でも、今日は日直が当たっていたから、少し早めに行きたかったんだもん……」

「それで急いでいたの。日直の仕事も大切だものね。でも、美咲が早く学校に行

きたいって思ったように、翔太くんが遅れて来るのにも理由があつたかもしれないよ?」

そう言われて、今朝のことを振り返ってみると、翔太くんが何か言いたそうにしていたことを思い出しました。

「何か思い当たることがありそうね。」

だったら明日の朝、言い過ぎたことを素直に謝つてみたらいいじゃない。そのほうが美咲もすつきりするんじゃない?

美咲が「相手の身になって話を聴こう」という気持ちになれば、きっと翔太くんも自分のことを話しやすくなると思うな」お母さんの言葉を聞いて、美咲さんは胸のつかえがおりていくようでした。そして、明日は優花さんと翔太くんに謝ることができるような気がしました。



「心の扉」を開く鍵

私たちは、家庭や学校、社会など、多くの人とのつながりの中で生きています。ところが、人間関係の大切さは分かっているても、日常生活にちじょうせいかつの中ではぎくしゃくしてしまふことがたびたびあります。

例えば、下級生の遅刻をたしなめようとした美咲さん。こんなときは、特に「正しいことを言っている」「自分は悪くない」という思いが強いだけに、自分の思いにとらわれて、相手の気持ちや周囲の状況が見えにくくなるようです。

私たちをとりまく事情も、そこでの心

の動きも、それぞれ違います。相手の言動などの表面的なことだけを見て責め立てるのでは、それがどれほど正しい忠告ちゆうこうであつても、相手は「非難された」ということ自体に抵抗ていこうを感じるでしょう。誰でも自分のことを否定ひていされれば、悲しく嫌いやな気持ちになるものです。そこで「心の扉とびら」が閉ざされると、お互いたがを理解し合うことはますます難むずかしくなります。

対照的たいしやうてきに、自分の思いをお母さんに受け止めてもらった美咲さんは、どんな気持ちだったでしょうか。「相手に理解して



もらえた」と実感したときは、本当にうれしいものです。私たちの「心の扉」は、そんなときにこそ開かれ、相手への親しみや信頼も増していくようです。

私たちは、自分の都合や自分の思いを一方的に通そうとするのではなく、まず自分から「相手の立場に立って考えよう」

「相手の心に寄り添おう」「相手の思いを受け止めよう」と心がけることが大切であると言えます。

次に紹介するのは、子供の心に寄り添った、ある母親の物語です。

いんなときは泣いてもいいよ

海辺の町までの短い支線しせんを持つ駅でのことです。

乗り換え客を待つ本線の電車へ、四、五歳の女の子、六、七歳の男の子、そして三十歳過ぎの母親が、ことごとごとと乗り込んで来ました。

ホームには、おばあちゃんが一人で。おそろしく、夏休みに海辺の里へ遊びに来ていた母子三人が、名残惜しく乗り換え駅までやってきた祖母に見送られて、帰って行くところでした。

二人の子供は、すぐ座席へ上がって、窓越しに、おばあちゃんと向き合いました。

やがて、発車のアナウンス……。

すると、男の子は、窓の向こうのおばあちゃんへ手を振ろうともせず、うつむいたまま、しくしく泣き出してしまいました。

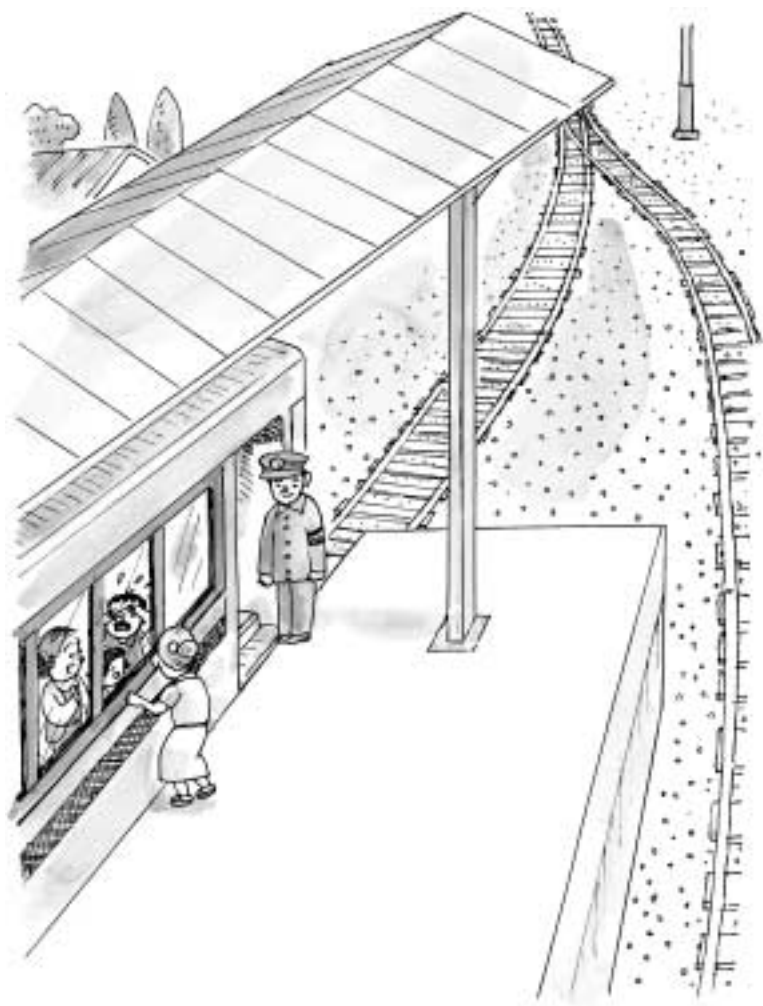
窓ガラスに顔をくっつけるようにして手を振っていた女の子に、

「おにいちゃん、泣くの、おかしいわよ」

と言われても、にぎりこぶしを口に当てて、しゃくり続けるばかりの男の子。

すると、母親が、それは、それはというほどの、やさしい声で言いました。

「いいのよ、いんなときは泣いてもいい



のよ。おにいちゃんは、やさしいから泣きたくなったのよね。泣いてもいいわよ。お母さん、弱虫で泣くのはきらいだけれど、やさしくて泣くのは大好きよ。お母さんだって、おばあちゃんと別れるの、さみしくって、本当は泣きたいんだから。だって、おばあちゃん、また、ひとりぼっちでしょ。おばあちゃんのことを思うと、泣きたくなるわよね」

これを聞くと、電車がホームを離れても、おばあちゃんに振った手を窓に当てたままにしていた女の子も、その手をそっと目に持っていきました。母親の祖母へのやさしい思いやりの言葉が、涙をさそったのでしょつ。

母親は、細めたまなざしで、二人の子供を、そっと見守るだけです。心やさし

い子を抱いてやりたいほどの思いでいっぱいだったのでしょうか。

(有吉忠行著『すばらしき母親の物語』モラロジー研究所刊より)

*

このとき、もし母親が「こんなところで泣いたら、みんなに笑われるわよ。みつともない」と言ったら、子供は「お母さんは僕の気持ちを分かってくれない」と、心を閉ざすことになったかもしれない。しかし、母親は子供が祖母の身を思つて涙していることを察して、「こんなときは泣いてもいいのよ」という言葉をかけたのです。

このひと言で、母と子の心の絆は確かなものになり、子供たちの思いやりの心もますます深まったことでしょう。

「理解する」とは、

相手の下に 立つこと

相手の心に寄り添って、周囲の人との絆を強めていくためには、日頃から「相手を理解しよう」という姿勢を心がけることが大切です。

「理解する」ということを、英語では「アンダースタンド (understand)」と言います。国立教育研究所長などを務めた教育者・平塚益徳氏（一九〇七～一九八一）は、「アンダースタンドという言葉の語源は『下に立つ』ということ。相手を尊敬し、相手から学び取ろうとする

謙虚な精神があつて、本当の理解ができる」と述べています。

一人ひとり違った「心」を持つ私たちにとつて、本当の意味で相手を理解するということは、とても難しいことです。しかし、だからこそ、自分から相手に歩み寄り、相手の心に寄り添おうとする努力が必要になるのです。

それは親が子供に対するとき、上級生が下級生に接するとき、または親しい友人との間であつても、「上」や「横」に立つことではありません。「相手よりも下に立つ」というほどの謙虚な心づかいで相手を思いやったとき、初めて相手の心的一端が見えてくるのかもしれない。かけがえのない人間関係は、そこから築かれていくのではないでしょうか。

それぞれの事情、 それぞれの思い

その朝、美咲さんはいつもより少し早く家を出ました。翔太くんの家を訪ね、昨日のことを謝ってから集合場所に行くこ



うと思っただのです。

集合場所とは反対の方向にある翔太くんの家のほうに歩いていくと、美咲さんの前を歩いていく女の子の姿すがたがありました。優花さんです。美咲さんは思いきつて優花さんに駆け寄り、声をかけました。

「優花ちゃん、昨日はゴメンね。ひどいこと言っちゃって……」

「あ、美咲ちゃん。私こそゴメンね。翔太くんの遅刻は私も気になっていたんだけど、みんなから責められた翔太くんがかわいそうになっちゃって……。ほら、私も集合時間ぎりぎりに行くほうだから」

「どうやら、優花さんも美咲さんのことを気にしていたようです。素直に謝ってみると、親友の二人が仲直りするの到时



間はかかりませんでした。

「そうだったの。でも優花ちゃん、集場所は向こうなのに、どこに行くの?」

「実は昨日、いろいろ聞いたんだけど、翔太くんには小さい弟がいるでしょ。翔太くんが学校へ行こうとすると、一緒について来ようとして、なかなか離れられないんだって。誰かが迎えに行けば早く出られるかもしれないから、これから行ってみようと思ってる」

「翔太くん、本当は優しい子なんだね。」

そういう気持ちを分かかってあげられなくて……。私、ちゃんと謝らなくちゃ。ねえ、優花ちゃん。私も一緒に行ってもいい?」

「もちろん」と言っとうなずく優花さんに、自然と笑顔になる美咲さんでした。